

第一章 永和地区の歴史

第一節 永和地区の概要

会津若松市の高野町と町北町は、市街地北西、国道四九号や国道一三二号が通り、沼木では、会津北部縦貫道会津若松北インターや磐越道会津若松インター、物流基地の会津アピオがある商業地区と水田に囲まれた穀倉地帯である。永和地区は、会津盆地中央からやや南東に位置していることから縄文時代の遺跡は今のところ確認されていない。会津若松インターの建設に伴い発掘調査が実施された屋敷遺跡では、弥生時代以降の土器や周溝墓が検出されていることから、永和地区に人が定着したのは弥生時代からのものである。上高野集落北側の大天白神社境内にある上高野貝塚は弥生時代後期の貝塚である。平安時代初期の九世紀になると永和地区では、屋敷遺跡、矢玉遺跡、上吉田遺跡、西木流遺跡という掘立柱を伴う大規模な集落跡が出現する。鎌倉時代や室町時代になると、ほぼ現在地の集落地もしくは、その周辺で集落が形成され今でも「おやがっさま」と呼ぶ「御館様」の在地領主が登場し、木流の穴沢氏、平塚の平塚氏、沼木の菊地氏、中ノ明の大島氏、中地・平沢の新(二)国氏、界沢の永井氏、森台の森代氏がいた。現在の集落形態になるのは、上杉景勝が越後から会津に入った慶長三年(一五九八)段階であり、その後、江戸後期にも越後からの移民が入り、洪水を克服し新田開発が進められた。

高野(こうや)

高野町には、高い野原や丘は無い。全国的に平安時代(一



二〇〇年前)に初期に開発されたところを当時は「こうや」と呼んでいた。その代表が和歌山県の高野山で、「高野」とは当て字で、高野町は平安時代初めに開発された地域を意味する。

町北(まちきた)

明治二十二年四月一日、栄和村が誕生したものの議会でことごとく上高野を主とする北側と中地を主とする南側が対立し、とうとう明治二十六年には分裂してしまつた。町北は、若松町の北側に位置することから町北村と名付けられたため。

永和(えいわ)小学校

明治二十二年(一八八九)二月、町北の各村と高野の各村が合併することが決まり四月一日「栄和(えいわ)村」が誕生した。同時に上高野小学校が栄和小学校へ改称された。しかし明治二十四年(一九一)村議会補欠選挙や村長選挙で両村はことごとく対立、明治二十六年六月三日、栄和村は分裂した。村が分裂したものの学校は、今まで通り一つで行こうとなり、明治二十七年二月両村で学校組合を設立し、呼び名の「えいわ」は残し、文字は「永く和が続くように」と願い「永和小学校」にした。永和小同窓会の記念誌「永輪(えいりん)」は永く輪が続くことを願ったものである。

会津アピオ

会津若松ICに隣接する会津アピオとは、ラテン語でネットワークの結ぶ、つなぐを意味するもので、平成四年二



月には卸商団地組合設立が設立され、平成七年十月には「会津アピオ」に名称が決定された。